



なかさと のぶかず
中里 信和 教授

～ てんかん学分野 ～

講義題目

むずかしいてんかんをやさしく、

ふかく、おもしろく、まじめに、ゆかいに

【略 歴】

1984年 3月 東北大学医学部医学科卒業	2008年11月 財団法人広南会広南病院副院長
1984年 6月 東北大学医学部附属病院	2010年 2月 東北大学大学院医学系研究科教授
1988年 6月 東北大学医学部附属病院助手	2010年 5月 東北大学加齢医学研究所教授 (併任～2017年1月)
1989年 8月 米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校研究員	2017年 4月 東北大学大学院医学系研究科障害科学専攻長 (併任～2023年3月)
1992年 1月 財団法人広南会広南病院	2022年 4月 東北大学大学院工学研究科教授 (併任)
1995年10月 国立仙台病院救命救急センター	2025年 3月 退職
1996年 4月 東北大学医学部助手	
2000年 4月 財団法人広南会広南病院臨床研究部長	

【研究業績等の紹介】

中里信和教授は、1984年に東北大学医学部を卒業し、鈴木二郎教授主宰の脳神経外科に入局されました。臨床研修と並行して脳磁図の将来性に着目し、1987年より工業技術院電子技術総合研究所と共同で超伝導センサの研究に着手されました。脳神経外科第2代教授に吉本高志先生が就任された1988年には助手として採用され、翌1989年より米国へ留学し、カリフォルニア大学ロサンゼルス校研究員として脳磁図とてんかん外科の研究に従事されました。帰国後、1993年に国内初のヘルメット型脳磁計を財団法人広南会広南病院に導入し、東北大学病院の多くの診療科と共同で脳磁図の応用分野を幅広く開拓されました。同時にてんかん診療体制の整備にも尽力され、2008年に財団法人広南会広南病院副院長に就任し、2010年に東北大学大学院医学系研究科教授に就任されました。これにより、日本初の「大学病院てんかん科」と「医学部てんかん学分野」が誕生しました。

中里教授の臨床基盤は、てんかん学、電磁気神経生理学、大脳機能マッピングにあります。全国から脳神経外科、脳神経内科、小児科、精神科、放射線科など多くの診療科の医師が集まり、また臨床検査技師、心理職、ソーシャルワーカー、看護職など多職種が参加するチームを、寄附講座1つと共同研究講座3つを運営しつつ築き上げました。診療では、1時間外来、オンライン診療、長時間ビデオ脳波モニタリングを核とする包括的入院精査など、世界トップレベルの診療体制を構築さ

れ、中でも毎週開催の遠隔てんかん症例検討会には全国各地、および海外からも多数の医師や医療従事者、学生らが参加しています。ここから新たに、てんかん専門医や大学病院てんかんセンターが数多く誕生しました。2015年に開始された厚生労働省てんかん地域診療連携体制整備事業では、東北大学病院が最初の認定施設となり、2023年の報告書では「好事例」として全国の模範であると評価されました。

こうした強固な臨床基盤の上で、中里教授は幅広い研究活動を展開されました。ヒト頭蓋内電極を用いた脳機能マッピング、てんかんの病態診断、てんかんと睡眠・自律神経系との関連は、臨床基盤なくしては展開できないテーマです。特に脳磁図は黎明期から取り組まれており、国内外との共同研究によって原著英文論文は100編を超えています。本学工学部との磁気センサ開発ではトンネル磁気抵抗素子を用い、2022年に室温での世界初の脳磁図計測に成功しました。脳磁図関連の国際学会を3回主催し、2021年に米国臨床脳磁図学会 Legacy Award（米国以外で初）、2022年に日本臨床神経生理学会島菌賞、2023年に日本生体医工学会荻野賞、国際臨床脳磁図学会 Lifetime Achievement Award（創設第1回）を受賞されました。2013年からは心理社会学を応用した臨床研究も開始し、てんかん学分野の研究テーマは「量子物理から心理社会まで」と言われるほど幅広い領域にわたっています。

てんかんが抱える大きな誤解と偏見を払拭すべく、中里教授は教育啓発活動にも尽力されました。国内外での講義や講演は15年間で600回を超え、入門書5冊は版を重ねています。新聞、雑誌、テレビ、ラジオ、SNS、プロスポーツと共同での市民啓発イベントなどでは、「知って安心、てんかん」のテーマで、「むずかしいことをやさしく」をモットーに、親しみやすい啓発活動を展開されました。